

令和4年冬、万世大路「ニツ小屋隧道 巨大氷柱」実見記



令和4年冬、万世大路「二ツ小屋隧道巨大氷柱」実見記

万世大路研究会（大滝会）

鹿摩貞男

はじめに

1月23日（日）、旧国道13号（旧万世大路）二ツ小屋^{ふいごう}隧道の巨大氷柱を見学してきたので報告する。今冬の福島は、例年に比べ雪が多く寒い。隧道の巨大氷柱も相当育っているのではないかと思われた。2週間ほど前に見学に行き来たという山友の情報によると例年に比べ大きくなっていて、現在の気候が続くと今年はかなり期待が持てそうだとのことであった。

朝9時、二ツ小屋駐車帯に集合し（東栗子トンネル福島側坑口駐車帯には除雪用作業車のため冬期間は駐車できない）、いつものように「万世大路をこよなく愛する人々」8名で見学に出かけた。

（なお、写真関連について冒頭お断りしておきたい。筆者愛用のカメラは、連絡道路（旧工事用道路）入口付近で故障して使用できなくなった。以降携帯（電話）により撮影してみたが不鮮明で使い物にならないものが多く、おまけに途中で電池切れとなっている。そこで、今回は他の参加者から写真のご提供を受けることとなりました。怪我の功名とでもいうのか、素晴らしい写真の提供を受けたために皮肉にも何時ものより充実した紙面になっているように思われる。）

アプローチ雪山斜面を直登

天候は、ほとんど風がなくほぼ快晴である。気温は結構高く登山中は汗をかくほどであった。積雪深は、国交省の二ツ小屋観測点では約150cmとなっており、我々の登山ルート^の積雪深でもあろう。雪山の上上りには絶好のコンディションである。

二ツ小屋駐車帯に集合し東栗子トンネル福島側坑口手前の旧国道への連絡道路上り口（E13 新栗子トンネル換気塔管理用通路）まで約1km、国道13号を歩いて行く（約20分）。今年は、除雪された雪もあるのかそのところの積雪が2.3mもある。2～30mほどは狭い幅で除雪されてはいたけれども、その終点の誰かがつくった階段を上り通路路面に出た。新換気塔前を通り連絡道路（旧工事用道路部分）へ進む。

夏場の場合は、二ツ小屋隧道へは新換気塔から連絡道路約1.0km（約20分）、旧国道約1.2km（約30分）で休憩時間を含めても1時間程度で到達できる。冬場は、これらの道路は行かずに、二ツ小屋隧道前の旧国道まで、雪に覆われた斜面ブッシュの上をほぼ直登して行く。従って距離は2km弱と短くなり、時間も短くなる場所であるが、途中休憩時間を多く取ったので、今回は夏場と同じ1時間ほどを要した。帰りは、30分もかからないで下りて来る事ができる。

ところで高低差であるが、東栗子トンネル福島側坑口の標高が約530m、二ツ小屋隧道の標高が約700mなので170mほどである。また、旧国道の連絡道路入口の標高は約630mなので、そこからの高低差は約100mとなる。

（写真1-1～6）



写真 1-1
国道 13 号(栗子ハイウェイ)東栗子トンネル福島側坑口。
筆者撮影 (以下同)



写真 1-2
国道 13 号(栗子ハイウェイ)旧国道連絡道路入口
(管理用通路部)を米沢側(東栗子トンネル右側駐車帯)
から望む。



写真 1-3
連絡道路入口(国道 13 号)は、約 2.3mの積雪で
誰かが造った雪の階段を上って管理用通路に出る。



写真 1-4
連絡道路(取付坂路部)を上る。
左側建物は E13 新栗子トンネル換気塔。



写真 1-5
連絡道路(旧工用道路入口)から
R13 東栗子トンネル福島側坑口付近を望む。



写真 1-6
連絡道路(旧工用道路部入口)から米沢側を望む。

取付坂路から上は、旧国道連絡道路ではなく雪の積もったブッシュの上の斜面をほぼまっすぐに登る。30 分ほどで旧国道(昭和期旧国道 13 号)に到着する。直登して行くけれどもほとんどは楽な斜面で1箇所急斜面となるところがあるけれども、今冬は雪が深かったせいかなそれほど感じなかった。ウサギのものであろうか、真新しい足跡を見つけた。

旧国道から上では、明治期万世大路「七曲坂」を突っ切って行く。途中には旧国道 13 号（「昭和の大改修」によるバイパス中間部）を横断するところもあり、両者は、酷似していて紛らわしく間違え恐れもある。斜面は若干きつくなるが二ツ小屋隧道前の旧国道に到着したのは丁度 11 時であった。

(写真 2-1~3) (写真 3-1~2)



写真 2-1

ウサちゃんの足跡かな？
(dark さん提供、以下同)



写真 2-2

一番上の道路、旧国道 13 号(第 2 代万世大路)、その下旧七曲坂(初代万世大路)3 段目道路。AM10:30 頃。



写真 2-3

旧「七曲坂」3 段目道路、福島側を望む。旧 13 号国道と間違いやすい。

到達箇所からは数分で坑口に到着、上り始めてから約 1 時間である。

坑口の雪は深く、御駐輦記念碑「鳳駕駐蹕之蹟」は見えなくなっていた。記念碑は、台座を含めると 1.2m あるので、積雪はそれ以上であることが確認できる。

(写真 3-1~2)



写真 3-1

二ツ小屋隧道側から福島側を望む。雪深し。AM11:00、二ツ小屋隧道前の旧国道 13 号(2 代目万世大路)に到着。



写真 3-2

二ツ小屋隧道福島側到着。右側大木の下に埋もれている二ツ小屋御駐輦記念碑「鳳駕駐蹕之蹟」(台座含め高さ 1.2m)。



写真 3-3

二ツ小屋隧道福島側坑口

なお、本稿では「氷柱」と「つらら」を原則的には使い分けている（厳密ではない）。これは筆者の感覚的なものであってオーソライズされているものではないことを念のためお断りしておきたい。一見すると文字通りの氷の柱で巨大な円柱状（或いは壁状）で原則的に天井から路面まで続いているようなものを「氷柱」と呼ぶこととしている。これらの「巨大氷柱」について、民家の屋根などに棒状に垂れ下がって冬期間普通に見られる「つらら」と一緒くたに呼ぶには違和感を感じざるを得ないからである。従って、円柱状（若しくは壁状）の大きなものを「氷柱」（ひょうちゅう）、多少大きめのものも含め棒状でぶら下がっていて通常の「つらら」を連想できるものはそのまま「つらら」と表現させていただいた。

巨大氷柱実見記

(1) 福島側坑口付近の 1 番目(左側)と 2 番目(右側)の氷柱群

二ツ小屋隧道福島側坑口から奥を覗くと坑口付近の氷柱と、巨大氷柱群が微かに見え、その間に米沢側坑口のあかりもはるかに見ることができる。坑口から 20m ほど進んだ所に延長約 30m の最初の内巻補修区間（注）がある（仮称第 1 号内巻）。内巻箇所は、天井や壁に段差（厚さ約 30 cm）があるのですぐ分かる（写真 4-8、写真 5-1 等参照）。

福島側坑口から最初の氷柱群は、その第 1 号内巻区間米沢寄りの左側（南側）の側壁（トンネルの脇の壁）及び天井から出現する（右側にも若干あり）。時期にもよるけれど冬季外には勢いよく湧水が吹き出しているところがある。その場所に来る氷柱は例年そんなに大きいものではないけれども、路面には、ほとぼしり出た湧水がそのまま凍り付いたような見事な凹凸模様の氷盤が見られることもある。今年は寒いせいかその着地点付近には例年にない規模の氷盤が形成されていたけれども綺麗なものではない。

今回は、その同じ場所の天井の打継目と思われるところにも比較的大きな氷柱が見られた。入口近くで気温が高くなるのであろうか例年大きな氷柱が落下しているのが見られる場所でもある。

（写真 4-1～12）

なお、表示している距離関係はいずれも歩測等による推定値で正確なものではなく目安程度と理解していただきたい。

注 内巻補修について

内巻とは従来の巻立コンクリート（トンネルの壁や天井のこと※）が劣化した為その内側にコンクリートを打設して補強すること（二ツ小屋隧道では厚さ約 30 cm、6 箇所推定）。

福島県において昭和 27～28 年度に二ツ小屋隧道補修工事施工。27 年度分巻立工約 70m（第 2 号内巻、1 箇所推定）。昭和 28 年度分「(工種) 巻立工 (工事内容) 延長 201.8m (5 箇所分推定)」(『福島土木監督所五十年史』福島土木監督所、昭和 30 年 5 月 1 日)

※ 巻立コンクリート

トンネルは地山（地中）掘削後その表面は土や岩石の状態になっている。その素掘表面をコンクリートや石材などを使って覆い天井や壁を造り空間を確保することを巻立と云う。その使用材料によりコンクリート巻（立）、木巻、煉瓦巻、石巻などと称する。できたものを覆工と云う。

〈福島側坑口付近の1番目(左側)氷柱群〉



写真 4-1

福島側坑口付近の最初の氷柱群。左側最初の氷柱群(第1号内巻区間)、右側奥2番目の氷柱群(第1号内巻米沢側端部)。一部修正 筆者撮影



写真 4-2

福島側坑口付近の氷柱群。左側最初の氷柱群(第1号内巻区間)、右側奥2番目の氷柱群(第1号内巻米沢側端部)。一部修正 山口屋散人さん提供



写真 4-3

福島側坑口付近の氷柱群。左側最初の氷柱群(第1号内巻区間福島側)、右側奥2番目の氷柱群(第1号内巻米沢側端部)。氷柱の発達、落下の多さ、規模の大きい氷盤等近年にない状況。奥に前衛の門番氷柱、巨大氷柱群が微かに見える。

矢内晴史さん提供



写真 4-4

福島側坑口付近氷柱群 左側。福島側から望む。 筆者撮影(以下同)



写真 4-5

福島側坑口付近氷柱群 左側。福島側から望む。



写真 4-6

福島側坑口付近氷柱群。
第 1 号内巻米沢側端部付近(米沢側)から望む。

右奥、1 番目の氷柱群。

左手前、2 番目の氷柱群。

矢内晴史さん提供

写真 4-7A →

福島側坑口付近氷柱群。
第 1 号内巻米沢側端部付近から望む。
dark さん提供



写真 4-7B

右写真 7A の右側氷柱根本(裾)。
まるで袴のよう。山口屋散人さん提供。



〈福島側坑口付近の 2 番目(右側)氷柱群〉



写真 4-8

福島側坑口付近氷柱群、2 番目(右・北側)。
奥に前衛の門番氷柱、巨大氷柱群が見える
(第 2 号内巻)。福島側から望む。筆者撮影 (以下同)



写真 4-9

福島側坑口付近氷柱群、2 番目(右・北側)。
米沢側から望む。

その第1号内巻補修区間の米沢側端部（打継目^{うちつぎめ}）の右側（北側）にも氷柱があり路面にも氷の塊ができています。2番目の氷柱群である。今回は比較的大きな氷柱となっているようだ。当該箇所は、夏場でも漏水が特に目立つところではないが、近年巻立コンクリートの劣化が進み一部崩壊し始めていて心配な場所の一つである。

写真 4-10

横（南側）から望む。



〈 約 2 週間前 1 月 10 日の状況 〉



写真 4-11

福島側坑口付近の氷柱群。
岡部達也さん提供 R040110
当該写真と前出 1 月 23 日とを比べると明らかに成長しているのが分かる。

〈 約 2 週間後 2 月 5 日の状況 〉



写真 4-12

福島側坑口付近の氷柱群。
岡部達也さん提供（一部修正） R040205
前出 1 月 23 日と比べると、あまり変化がないように見える。



〈 再掲 1 月 23 日 〉

写真 4-2

福島側坑口付近の氷柱群。
R04012

(2) 巨大氷柱群(第2号内巻区間)の福島側と米沢側

〈福島側から望む巨大氷柱群〉

第1号内巻から20mほど米沢側へ進むと2番目の内巻補修区間（仮称第2号内巻）がありその起点部付近には、まるで門番のようにやや細めの氷柱ができる。例年、つらら状に垂れ下がっている事が多いけれども、天井から路面までしっかりと氷柱を形成していた。

(写真 5-1~4)



写真 5-1

巨大氷柱群福島側前衛の門番氷柱(第2号内巻起点付近)。福島側から望む。第2号内巻端部が見える。

筆者撮影



写真 5-2

巨大氷柱群福島側前衛の門番氷柱(第2号内巻箇所起点付近)。福島側から望む。山口屋散人さん提供(一部修正)。奥に巨大氷柱群が見える。



写真 5-3

前衛の門番氷柱(第2号内巻箇所起点付近)。横から望む。

筆者撮影



写真 5-4

前衛の門番氷柱(第2号内巻箇所起点付近)。米沢側から望む。

darkさん提供

さらに20mほど米沢側へ進むと、第2号内巻区間の福島寄りになるが目当ての「巨大氷柱群」が現れる(福島側坑口からは100m程の所と思われる)。それらの前に立つといつもながらその巨大さにまず圧倒され、この天然の造型美を前にしばし見とれてしまう。本当に見事というほかない。

これら「巨大氷柱群」には、大きいものが4箇所あり、1番目が中央に垂れ下がっているもので最大である(中央氷柱)。その高さは、トンネルの高さ自体が5.1mなのでそれぞれの氷柱は5mを超えていることになる。福島側から見るとこの中央氷柱は、天井に複数の吹き出し口が見える。足元では2本のように見えるが、年によってはまとまって1本の円柱状に見えることもある。今年、足元の直径が2.7mほどあって近年にない大きさである。2番目の左側(南側)の氷柱は、中央氷柱と比べて細いけれども遜色なく、むしろ中央氷柱よりも



写真 5-5 巨大氷柱群(第2号内巻区間福島側)。

福島側から望む(右北側氷柱見えず)。darkさん提供



しっかりと路面まで円柱状になっている。例年は下部が竹箒のように枝別れしている事が多い(南側氷柱)。3番目の右側(北側)には、幾本かの氷柱が合体して壁状になった華麗なる氷柱が道路中央近くまで伸びている(北側氷柱)。さらにその数メートル米沢側の奥にも少し小振りではあるけれども透明で美しい4番目の氷柱が見られる(奥の氷柱)。この他、大きいつららが何本も垂れ下がっている。

(写真5-5~12)

写真5-6 巨大氷柱群(第2号内巻区間福島側)。
福島側から望む(左南側氷柱見えず)。 矢内晴史さん提供



写真5-7
巨大氷柱群に圧倒さる。
天然の造型美、創造神のなせる業。
山口屋散人さん提供



写真5-8
でかつ、巨大氷柱群福島側、右中央氷柱、下幅2.7m。
山口屋散人さん提供



写真5-9
巨大氷柱群、福島側から望む。
(左・南側氷柱見えず。)

筆者撮影



写真5-10
巨大氷柱群、福島側から望む。
中央氷柱、下幅2.7m(実測)。

筆者撮影

〈約2週間前1月10日の状況〉



写真5-11

巨大氷柱群(第2号内巻区間福島側)。
岡部達也さん提供 R040110
当該写真と前出1月23日とを比べると
明らかに成長しているのが分かる。

〈約2週間後2月5日の状況〉



写真5-12A

巨大氷柱群(第2号内巻区間福島側)。
岡部達也さん提供(一部修正) R040205
前出1月23日と比べると、若干成長しているように
見える。

〈再掲 1月23日〉



写真5-10

巨大氷柱群、福島側から望む。
R040123



写真5-12B

写真5-12Aに同じ。
岡部達也さん提供(一部修正) R040205
前出1月23日と比べると、若干成長しているように
見える。

〈米沢側から望む巨大氷柱群〉

これらの「巨大氷柱群」は、福島側から眺めた場合と米沢側から見た場合ではその様相がガラリと変わり興味深いものがある。また脇から眺めた場合なども別の姿に見えて面白い。

(写真 6-1~4) (写真 6-7~8)



写真 6-1

巨大氷柱群(第2号内巻区間福島側)を米沢側から望む。4箇所巨大氷柱が確認できる。
1番目の中央氷柱は、吹き出し口が2箇所のように見えるが合体して1本の氷柱となっている。
2番目の右(南側氷柱)はしっかりと路面まで着地している。
3番目の左(北側氷柱)は壁柱氷柱に続き中央側に大きなつららが続いている。
右手前氷柱、当該氷柱群4番目の「奥の氷柱」と称しているものである。

矢内晴史さん提供

写真 6-2 →

巨大氷柱群(第2号内巻区間福島側)を米沢側から望む。4箇所の巨大氷柱が確認できる。

darkさん提供(以下同)



写真 6-3

巨大氷柱群(第2号内巻区間福島側)を米沢側から望む。4箇所の巨大氷柱が確認できる。



写真 6-4

巨大氷柱群(第2号内巻区間福島側)を米沢側から望む。「奥の氷柱」を除く3箇所の巨大氷柱が確認できる。

巨大氷柱群の内側は、あふれ出た水がそのまま凍ったような状態で、なめらかなに波うつ感じの厚い氷盤となっていて、登山靴や長靴だけでは滑って歩けず危険なのでアイゼン（滑り止め用として靴底に装着する金属製の爪）を装着する必要がある。氷盤の上には、氷柱のカケラがいくつか転がっていて落下したものであろう。また各氷柱の竹箒のような足下も実に美しい。

巨大氷柱の吐き出し口のように見える天井部の氷柱も圧倒的な迫力である。(写真 6-5~6)



写真 6-5
箒のような巨大氷柱(中央氷柱)の足元。



写真 6-6
巨大氷柱群、天井部(吹き出し口)。米沢側から望む。
左北側氷柱、右奥中央氷柱(写真 6-5 はその足元)。

この巨大氷柱群の箇所については通常漏水があるといっても^{しみしゅつ}滲出している程度で、特に湧水の顕著なところではないように思える場所である。目の前の巨大氷柱群を見ていると、どうしてこんなに大量の湧水があるのか不思議に思われるほどである。いずれにしても、当該箇所は内巻補修がなされた区間であり、元々漏水の激しかったところとも考えられる。内巻補修は、昭和 27 年度と 28 年度の 2 ヶ年にわたって実施されているが、当該箇所は最初の 27 年度に施工されていると思われる。さらに当初 (S8.5~S9.12) 施工された巻立コンクリート(トンネルの天井や壁のこと)の経年劣化が進んでいるところであることも確かであろう。当該箇所は、例年巨大氷柱が見られるところである。

〈 約 2 週間前 1 月 10 日の状況 〉



写真 6-7
巨大氷柱群、米沢側。岡部達也さん提供 R040110
当該写真と前出 1 月 23 日とを比べる後者が明らかに成長している。

〈 約 2 週間後 2 月 5 日の状況 〉



写真 6-8
巨大氷柱群、米沢側。岡部達也さん提供 R040205
前出 1 月 23 日と比べると、今回のものが成長している。

〈 再掲 1 月 23 日 〉 →

写真 6-3
巨大氷柱群、米沢側。



(3)米沢側坑口付近の巨大氷柱群

当該巨大氷柱群から米沢側坑口までは 300m弱と思われる。その間、米沢坑口までは特に顕著な氷柱は見当たらないけれども、3箇所ほど面白い氷柱やつららが見られる。

まず第3号内巻と第4号内巻の間の右側である（米沢側坑口から約200m地点）。この付近は、最近コンクリート側壁の崩壊が進んでいる。夏場は、漏水があるといっても滲出している程度の場所で、また紹介するほどのところでもないが覆工（巻立）コンクリート崩落の危険箇所として認識する必要のあるところと思われる（写真7-1A）。



写真7-1A
第3号・第4号内巻間の右側（福島側から見て）側壁崩壊が進行する。第3号内巻区間の米沢側の端部が見える。米沢側から望む。darkさん提供（以下同）



写真7-1B
覆工（巻立）コンクリート側壁部崩落箇所。第3・4号内巻区間の間。写真右側奥に第3号内巻の米沢側端部が僅かに見える（昭和28年〔1953年〕補修箇所）。崩壊箇所は、昭和9年〔1934年〕施工箇所。米沢側から望む。

次に、第4号内巻区間の米沢側端部で（米沢側坑口から約150m地点）、覆工（巻立）コンクリートが大きく崩落している。年々崩壊が進み現在は頂部にまで及んでいて大崩落が発生しトンネルが閉塞されるのではないかと懸念される。崩落土石は柱状の破片になっていて玄武岩ではないかと考えられる。堆積していた崩落土石はボランティアの手で除去されバリケードが設置されている。当該箇所についても、通常ほとんど湧水は見られないところであるが小さな「つらら」があり、その路面には小さいながら氷筍が見られるようになっている（写真7-2）。

そこから米沢側に少し進んだ所に第5号内巻区間があり、その米沢側端部付近（米沢側坑口から約100m地点）では福島側の前衛門番のような後衛の門番氷柱が見られる。落下してしまっで見られない年もある。福島側坑口では雪の吹き込みはほとんど見られないけれども、米沢側の雪の吹き込みは、例年この辺りまであり（米沢側坑口から約100m）西風の凄まじさを目の当たりにするようだ（写真7-3A）。



写真7-2 覆工崩壊箇所のつららと氷筍。
第4号内巻区間、米沢側端部。
米沢側から望む。



写真 7—3A

第 5 号内巻区間米沢側端部付近の後衛門番氷柱。
雪の吹き込みあり。米沢側から望む。 筆者撮影



写真 7—3B

第 5 号内巻区間米沢側
端部(米沢側坑口から
約 100m)付近の後衛
門番氷柱。
米沢側から望む。
筆者撮影

さて、いよいよ巨大氷柱の最後の場所となるけれども、米沢側坑口の「明り巻^{あかりまき}(注 1)」区間(約 30 m)の中間付近左側(南側)に覆工(巻立)コンクリートが部分的に崩落して坑外の景色が覗けるようになっている場所があり(開口部は今年 2 箇所になっている)、その開口部(穴)の回りに数本の巨大氷柱が見られる。そこからさらに奥の方(福島側)へ 10 数メートルほど氷柱が連なっていることがある。その区間は、覆工コンクリート(側壁部)が剥落(はくらく^{はくらく})している部分である。連続した巨大氷柱(或いは氷壁)はなかなか壮観である。しかし今年はそれぞれの氷柱は大きいけれども若干中抜きになっているようだ。

ところで、米沢側坑口の上は谷間状の地形になっていて、仮称白竜沢(注 2)があることからその流水の流末となっていた当該覆工開口部に流れ込んでいた。現在は、流末に元々あった付替水路が復活(土石に埋まっていたがボランティアにより除去)して、開口部への白竜沢からの流入はなくなっているが、地形の関係で崩落箇所へまわりから集水されて流入し氷柱ができるようである。

(写真 8—1~4)

注 1 明り巻(あかりまき)

トンネルは通常、地山(地中)を掘削して洞穴にした後にコンクリート等を用いてその表面を覆うことで、壁や天井を造り空間を確保する。この作業をコンクリートの巻立^{まきだて}という。巻立されたものを覆工(コンクリート)と云う。

「明り」とは、トンネルに対して用いられる用語で、トンネル以外の道路の部分の部分を云う。すなわち明り巻とは、地中ではなく、地上(坑外、明り部)でドームのようなトンネルを造ることである。地中の場合と同じようにコンクリート等で天井や壁を造る(巻立)ものである。

注 2 仮称白竜沢について

普通に見られる小さな沢で名称不詳につき報告書記述上不便なので仮称で呼んでいるもの。菅原白龍画の栗子隧道十二景「栗嶺奇観」(明治 14 年 7 月)の 5 枚目の「二ツ小屋隧道」に描かれている。



写真 8 —1 A

米沢側坑口付近の左(南)側巨大氷柱群。
手前、コンクリートが剥落している劣化側壁部の氷柱群(写真 8 —1 B)参照。
奥は覆工開口部(崩落箇所)の氷柱(写真 8 —1 C)参照。
筆者撮影(以下同)



写真 8 —1 B

コンクリートが剥落している劣化側壁部の
連なっている巨大氷柱群。
右端は開口部氷柱群。



写真 8 —1 C

米沢側坑口付近氷柱群。
覆工コンクリート崩落箇所開口部
(米沢側坑口から 20m 付近)の氷柱。
開口部が 2 箇所見える。



写真 8 —2A

米沢側坑口付近左(南)側氷柱群。
覆工コンクリート崩落箇所開口部(米沢側坑口から 20m 付近)
の氷柱群。
開口部が 2 箇所見える。
手前の開口部は、昨年は見られなかったと思われる。
dark さん提供(以下同)



写真 8 —2B

米沢側坑口付近氷柱群(左側最奥)。米沢側から望む。
コンクリートが剥落している劣化側壁部。



写真 8 —2C

米沢側坑口付近氷柱群、覆工崩落箇所(開口部)。



写真 8 —3A 米沢側坑口から坑内を望む。
右手前の氷柱は、以前は小さく目立たなかったもの。



写真 8 —3B
以前は小さなものであったが、
今年は氷柱が育っている。



写真 8 —4A
米沢側坑口開口部手前から福島側を望む。
手前覆工崩落箇所(開口部)氷柱群(写真 8 —2C)参照。



写真 8 —4B
第 6 号内巻区間(米沢側坑口から約 80m)中間部から
福島側を望む。奥に見えるのは第 5 号内巻区間米沢側
端部(米沢側坑口から約 100m先)。

二ツ小屋隧道の米沢側坑口は、例年のことであるが福島側坑口より雪が多い。今冬は例年になくさらに多いように思われる。また、坑口では雪庇も巨大になっていた。栗子山からの西風をまともに受け日当たりも悪く吹き溜まりとなるためであろう。この坑口から烏川橋までの旧国道は、北向き斜面ということもあって例年 5 月の連休頃まで雪が残り除雪をしないので車両の通行ができない。今年は、我々が見学したあとも雪が降り続けているので、連休が明けてもしばらくは通行出ないのではなかろうか。(写真 9—1~2)



写真 9 —1 米沢側坑口。雪深し。



写真 9— 2A 米沢側坑口から望む。(筆者撮影、以下同)



写真 9— 2B 米沢側坑口前の巨大雪庇。坑内から望む。

おわりに

二ツ小屋隧道からは12時20分頃引き返した。今年もまた十分に巨大氷柱を堪能することができた。今年の氷柱は、少なくともここ10年くらいの中では一番大きいように思われる。

二ツ小屋駐車帯には13時過ぎに戻った。

【謝辞】

万世大路研究会HP管理人様には掲載にあたりお世話になりました。また、現場案内の山口屋散人さんには冬山道具1式を借用しました。ご両者に感謝申し上げます。

今回は冒頭でお断りしましたように、筆者のカメラが故障したため、dark-RXさん・山口屋散人さん・矢内晴史さんから素晴らしい写真の提供をしていただきました。また、山友の岡部達也さんからも貴重な現地写真の提供を受けています。お陰様でいつにも増して充実した報告書を纏めることができたものと思っております。皆様に衷心から御礼申し上げます。

(なお、甚だ恐縮ですが編集の都合でご提供写真の一部について、トリミング・修正を施しております。大変申し訳ありませんがご理解を賜りますようお願いいたします。)

《ご注意》

注意喚起については毎回本欄にて呼びかけているところですが、氷柱見学中に後述するような事故が今回発生しました。見学にあたってはさらなる注意が必要になると思われま

す。当レポートは、当該「二ツ小屋隧道巨大氷柱」見学を一般の方々にお奨めしようというものではありません。冬期の二ツ小屋隧道に行くためには完全な冬山装備が必要であり、何よりも冬山登山の豊かな経験を持ち、かつ当該地形を知悉したガイドさんに案内して貰わないと行ける所ではありません。何かあれば今回のような重大事故に繋がることとなり大変危険な場所（隧道内は崩落・氷柱落下等の恐れあり）なので、単独行動を取られることのないようくれぐれも注意して頂ければと思います。

今回発生した事故は、福島テレビ（FTV）の報道によりますと2月11日（金）建国記念の日、二ツ小屋隧道で氷柱見学中に「直径1メートルほどの『つらら』が落下して破片が飛び、福島県外から訪れた60代の男性の頭に当たったという。……男性はドクターヘリで病院に運ばれたが、命に別状はない」というものです（FTVホームページ 令和4年2月12日 閲覧、当日のFTVニュース視聴していない）。

その後新聞報道もなく事故の詳細は依然として不明ですけれどもこのような事故が二度と起こることのないようお願いしたいものです。



No.1 注意喚起看板、連絡道路(旧工用道路)登り口。
岡部達也さん提供 R040212 (以下同)



No.2 注意喚起看板(巨大氷柱前)、福島側から望む。